中世ロシア文献『カザンハン国史』の書誌学的諸問題と史料的価値

田辺真実

はじめに

ロシアの年代記は中世ロシア史の重要な史料であるが、史料として使用するに当たって、厳しい史料批判が要求されるということは、常々指摘されてきた。[1] 特に、タタール[2]関連の記事については、一五世紀半ば以降にモスクワで編纂された年代記が、事実を歪曲してまでタタールを貶め、モスクワ大公に阿る傾向があるため、注意が必要である。[3] 日本においてもロシア年代記の使用の危険性についてはすでに指摘されている。[4]

しかしながら、ロシアとタタールとの関係を明らかにするためには、他の史料が僅少であるため、このように扱いの難しいロシア年代記を史料として使用することが不可欠となる。従って、ロシア・タタール関係の研究においては、まず、年代記一つ一つの問題点について把握することが要求される。

そこで本稿では、この作業の一つとして、文学作品としての価値は広く認められつつも、史料としての価値には現在でも異論の多い、ロシア年代記全集第一九巻所収の『カザンハン国史』[5]をとりあげる。この書は、バトゥによるルシへの攻撃から説きおこされ、ジョチウルスの後裔国家カザンハン国の成立、カザンハン国とモスクワ公国との対立の経緯などが語られ、前半はイヴァン雷帝による最後のカザン遠征が決定される一五五二年の御前会議の記述で終わっている。後半には、イヴァン雷帝によるカザン征服、

カザン征服後に起こったカザンにおける反乱などが記されている。

この年代記については、一八―一九世紀のロシアの歴史家カラムジン Н. М. Карамзин が「この年代記はいつも信頼できるとは限らない」[6]と疑問符をつけた一方、一九六〇年に『ゾロタヤオルダの崩壊』を出版したジョチウルスの研究者サファルガリエフ M. Г. Сафаргалеф は「ロシアの史料の最も重要な文献の一つ」[7]と言うなど、歴史家の評価が分かれており、ロシア年代記の中でも、特に扱いに注意が必要なものである。一九六七年にはアメリカのキーナン E. L. Keenan が、『カザンハン国史』は従来言われているような一六世紀の作品ではなく、一七世紀に成立したフィクションであるという説を提唱した。[8]しかし、ソ連においてはこのキーナンの説に対して何の反応も示されず、一九八九年に出版された中世ロシア文献の解説書『古代ロシアの愛書家と愛書の辞典』や、同年出版の『カザンハン国史』の写本についてのドゥブロヴィナ Л. А. Дубровина の研究においても、キーナンの説は全く言及されていない。[9]一方、欧米においては一九六九年にケンプフェル F. Kämpfer が、キーナンの説はこれまでの『カザンハン国史』についての説を水泡に帰せしめるものではあるが、彼が提示する説には十分な根拠がない、と批判した。[10]また、一九九八年にアメリカ・イギリスで出版されたオストロウスキ D. Ostrowski の著作においては、『カザンハン国史』の成立年代について若干言及された。そこではキーナンの『カザンハン国史』一七世紀成立説が支持されており、[11]『カザンハン国史』については、書誌についてさえ一致した見解が得られていない状況である。

そこで本稿では、『カザンハン国史』の書誌についてロシアと欧米で出されている全く異なった見解を比較検討し、『カザンハン国史』の書誌について妥当な見解を導き、更に、『カザンハン国史』を史料として如何に使用すべきかを明らかにする。

① М. Н. Присекков, *История русского летописания XI–XV вв.*, СПб. 1940/1996, с. 35–37 ; J. S. Luria, "Problems of Source Criticism (with Reference to Medieval Russian Documents)", *Slavic Review* XXVII–1, 1968 ; idem, "Fifteenth-Century Chronicles as a Source for the History of the Formation of the Muscovite State", Michael S. Flier and Daniel Rowland ed., *Medieval Russian Culture* II, Berkeley et al. 1990.

② タタールという言葉は、もともとチンギスハンに征服された一部族の名称であったが、西方では次第にモンゴルの同義語として使用されるようになった。ロシア側の史料においては、「モンゴル」ではなく、「タタール」の語が使用されているため、ここでは、「タタール」の語を使い、西部ジョチウルス、いわゆるキプチャクハン国、或いはゾロタヤオルダに属した人々とその後裔という意味で用いる。

③ E. L. Keenan, "Muscovy and Kazan : Some Introductory Remarks

on the Patterns of Steppe Diplomacy", *Slavic Review* XXVI, 1967, pp. 549-550 ; D. Ostrowski, *Muscovy and the Mongols : Cross-cultural Influences on the Steppe Frontier, 1304-1589,* Cambridge et al. 1998, pp. 144-163.

④ 田中陽兒「国本哲男『ロシア国家の起源』」『歴史学研究』四五四号一九七八年五八頁。ここにおいて田中氏は『ニコン年代記』の使用について注意を促している。

⑤ *История о Казанском царстве (Казанский летописец),* подг. Г. З. Кунцевича, (Полное собрание русских летописей, 以後 *ПСРЛ.* XIX), СПб. 1903. この年代記は主に История о Казанском царстве 或いは Казанский летописец, Казанская история として知られている。本稿では Кунцевич に従い、История о Казанском царстве を採用した（題名の問題については Г. З. Кунцевич, *История о Казанском царстве или Казанский летописец : Опыт историко-литературнаго исследования,* СПб. 1905, с. 188–189 参照）。

⑥ Н. М. Карамзин, *История государства российского,* СПб. 1852, VIII. при. 237.

⑦ М. Г. Сафаргалиев, "Критика и библиография : 《Казанская история》 под. Г. Н. Моисеевой", *Вопросы истории* VII, 1955, с. 148.

⑧ E. L. Keenan, "Coming to Grips with the Kazanskaya Istoriya : Some Observations on Old Answers and New Questions", *The Annals of the Ukrainian Academy of Arts and Sciences in the United States* XI : 1-2, 1967.

⑨ *Словарь книжников и книжности древней Руси,* вып. 2. ч. 1, А–К, ответственный ред. Д. С. Лихачев, с. 452-454 ; Л. А. Дубровина, *История о Казанском царстве (Казанский летописец) : списки и классификация текстов,* Киев 1989.

⑩ F. Kämpfer, "Die Eroberung von Kazan 1552 als Gegenstand der zeitgenössischen russischen Historiographie", *Forschungen zur osteuropäischen Geschichte* XIV, 1969, S. 22.

⑪ D. Ostrowski, *op. cit.,* p. 242. ここでは、他の点については触れられていない。

一　原型テキスト протограф の構成

『カザンハン国史』の写本は現在二七〇知られており、多くは一七世紀の写本である。しかし、これらの写本の大部分は前半部分、すなわち、カザン出兵を決定する一五五二年のモスクワにおける御前会議までの部分は含まれているものの、イヴァン雷帝のカザンへの遠征を内容とする後半部分は含まれておらず、かわりに、他の書物、例えば『階梯書』Степенная книга や『皇帝・大公イヴァン・ヴァシリエヴィチ治世初期の年代記』Летописец начала царства царя и великово князя Ивана Васильевича ① などのカザン征服の記述の抜粋が配置されており、後半部分は写本間の相違が大きい。これに加えて、いくつかの写本に共通して前半の五章分が欠落していたり、順序が入れ替わったりしているため、原型テキストについてこれまで多くの議論がなされてきた。

キーナンの意見が出る一九六七年までには、クンツェヴィチ Г. З. Кунцевич、モイセーヴァ Г. Н. Моисеева、ココリナ С. И. Кокорина の研究によって、原型テキストは、前後半ともそろったものであり、さらに、いくつかの写本で欠落していたり順序が入れ替わったりしている二―六章は、原型テキストにおいては一章の次に置かれていた、そして、最終章はイヴァン雷帝死後に付け加えられたものである、という結論が出されていた。[2] 写本は、前後半とも含むものが全て初期のものとされ、四九章までしか含んでいない多くの写本において、後半が失われ、他の年代記からの引用が配置されている理由は、クンツェヴィチにより、ある写字生が、『カザンハン国史』の後半の記述を他の公的な年代記の記述に近づけるために、テキストを半分に分けて後半を削除し、代わりに公的な年代記からの抜粋を並べた、と説明されていた。[3]

この説に対してキーナンは、一九六七年の時点で出版されていた二種の校訂テキストをもとに、先行研究によって初期のものとされる、前後半が一貫したスタイルの系統 редакция の前半と、後期のものとされる、後半が他の年代記からの引用から成る系統の前半を比較し、前者よりも後者の方がテキストの乱れが少ないことを証明した。そして更に、各系統における二―六章の欠落や順番の入れ替わり、後者の系統における四九章末の途切れ方などの分析から、原型テキストは前半だけであり、後半は、後世他の年代記を材料にして別の人物が創作したものであるという仮説をたてた。[4] しかし、キーナンの新説は膨大な写本の内、校訂テキストから情報を得られるわずか一二写本に基づいたものであり、信頼のおけるものではなかった。

一方ドゥブロヴィナは、新たに発見した三九写本を含む二七〇写本を精査したうえで、一九八九年に新たな説を提示した。[5] 彼女は写本を三つに分類した。

第一タイプの原形テキストは、一五八四年から一七世紀の初めにかけて成立したと考えられるもので、六つの写本がこのタイプに当てはまる。このタイプの特徴は、『カザンハン国史』の原型テキストからの二―六章の省略と最後の二章の付加（この二章は、イヴァン雷帝の死後につけ加えられたと考えられる）、カザンの最初の成立の逸話の改編である。カザンの成立については、原型テキストにおいて、一三世紀、バトゥの後継者のサイン・ハン Sayn Ḫan[6] によるとされていたが、一二世紀、モンゴルの来襲の前にブルガールのサイン・ハンがカザンを建てたことに変更された。また、カザン成立後すぐにルシの公がブルガールを攻撃し、ブルガールはルシの公の朝貢国となったことが強調される。この

カザンの成立の逸話に関する変更は、一五五二年と一五五六年にイヴァン雷帝が征服したカザンとアストラハンを、オスマントルコとクリムが、タタールのユルトとして一五七〇―九〇年代に返還を要求したことが原因だと考えられる。

第二タイプの写本は、後半が他の年代記からの引用によって成り立っているものである。第二タイプの祖本は現在まで伝わっていないようであるが、一五九二年以降一六一〇年代までに成立したと考えられる。このタイプに属する写本においては、大部分の写本における第四九章「皇帝たる大公の、カザンについての自らのボヤーリンたちとの協議」の章に後続する『カザンハン国史』の原型テキストの内容が失われており、前半においても第二五章「カザンにおける反乱の始まり、ハンの追放、モスクワからシャーフ・アリー・ハン Šah 'Alī Ḫan を得たことと彼の逃亡について、そして、チョラ Čora 公の殺害についての話」におけるカザンの英雄チョラ公の勇ましい死についての部分が削除され、はっきりと反タタールの感情が反映されている。ルシ軍の敗北の記述が短縮された系統も存在する。

ドゥブロヴィナの見解によれば、第二タイプで『カザンハン国史』の原型テキストの後半が失われたのは、全く機械的に半分で途切れていることから、偶然によるものであり、恐らく一六世紀末から一七世紀初めにかけてのリューリク朝断絶後の動乱故である。後半の内容を保存した写本の存在が知られなかったために、残った前半部分に、他の年代記からの引用によってカザン陥落の部分が補われた。そして、これが『カザンハン国史』の主流となり、動乱の終結後、一六一〇年代の愛国心の高まりと、君主権確立の動きのために、このタイプに反タタール色の強い改変がなされたと考えられる。

この二つのタイプはそれぞれ別々に『カザンハン国史』の原型テキストからつくられたものである。より原型テキストに近い第二タイプの前半と、原型テキストの形をほぼそのまま残した第一タイプの後半をあわせ、さらに、チョラ公の死についての部分を第一タイプの前半から補填したものが第三タイプである。これは一七世紀の六〇年代に成立したと推定される。

ドゥブロヴィナの説は、初期の系統よりも、後期の系統の方がテキストの乱れが少ないというキーナンの指摘をうまく説明しうる優れたものである。しかしながら、ドゥブロヴィナは、『カザンハン国史』の成立年代について、問題のあるモイセーヴァの一五六四―一五六五年説を無批判に採用している。[7] このため、彼女の説における諸系統の成立年代については、なお検討の余地がある。また、彼女の説における、第一タイプの最後の二章がイヴァ

ン雷帝の死後に原型テキストに付け加えられたという考えが、一五六四―六五年成立説を前提として出されたものなのか、写本の特徴をもとに出されたものなのか、明らかでない。よって、この点については留保が必要なものの、基本的には、原型テキストの問題についてはドゥブロヴィナの説を採り、『カザンハン国史』の前後半ともに原型テキストに含まれていたと考えるのが妥当である。

① それぞれ *ПСРЛ.* XXI, XXIX に収録されている。

② Кушевич, Указ. соч. с. 164–188 ; *Казанская история*, подг. Г. Н. Моисеевой, М.–Л., 1954 (以下 КИМ.), с. 20–39. この書籍のマイクロフィルムを栗生沢猛夫氏に拝借することができた。ここに記して謝意を表す。С. И. Кокорина, "К вопросу о составе и плане авторского текста 《Казанской истории》", *Труды отдела древнерусской литературы* (以下 *ТОДРЛ.*) XII 1956, с. 581–584. なお、この他に М. Н. Тихомиров が原本を六七章までとする説を提示しているが [*Источниковедение истории СССР*, I, Москва 1962, с. 264]、すでに F. Kämpfer に論駁されている [op. cit., SS. 21–22]。

③ Кушевич, Указ. соч. с. 180.

④ Keenan, "Coming to Grips with the Kazanskaya Istoriya", pp. 151–170.

⑤ Дубровина, Указ. соч.

⑥ イスラム名については、年代記におけるロシア語表記にヴァリアントが多いため、本稿ではアラビックのローマ字転写で表す。

⑦ Дубровина, Указ. соч. с. 3.

二　著　者

著者の履歴については『カザンハン国史』の冒頭に以下のように語られている。

私の罪の故に、私は蛮族によって捕らえられ、カザンに連れて行かれた。私はカザンのハンの Сап Гирей (Ṣafa' Girey か?) に貢物として引き渡された。ハンは私を自分の宮廷で働くようにと、慈愛をもって自らのもとに引き取り、私を自分の面前に侍させた。そこで私は二〇年間、彼のもとで虜囚として辛抱した。カザンの陥落時に、私はカザンから、皇帝たる大公の名のもとに逃れた。かのお方は、私をキリスト教に改宗させ、聖なる教会に親しませ、彼に仕えながら住むようにと小さな土地を領地として私に与えた。①

この言葉を信じるとすれば、著者は、カザンに捕虜として二〇年間滞在し、カザン陥落後はキリスト教徒としてイヴァン雷帝に仕えた、ということになる。また、著者は、『カザンハン国史』の他の箇所で三度、自らがカザンにいたことを示唆している。②

ところが、『カザンハン国史』の著者が自ら語る履歴の信憑性について、まずオルロフ A. C. Орлов が疑問を呈した。彼は、

一五世紀後半から一六世紀初期の作品『トルコ人による一四五三年のコンスタンティノープル陥落の物語』Повесть о взятии Царьграда турками в 1453 г. と『カザンハン国史』の様々な類似から、『カザンハン国史』の著者がこの作品を知っていたと考え、前者の巻末に記された著者ネストル・イスカンデル Нестор Искандер の境遇と、『カザンハン国史』の著者が自ら語る履歴が酷似していることから、『カザンハン国史』の著者は『トルコ人による一四五三年のコンスタンティノープル陥落の物語』を真似したのだとし、『カザンハン国史』の著者の自らについての言葉も文学的な技巧に過ぎないと考えた。③

このオルロフの主張に対してモイセーヴァは、『カザンハン国史』におけるタタールやカザンについての記述の詳しさを根拠に、著者がカザンに長く滞在していたであろうことを指摘し、『カザンハン国史』の著者の言葉は信頼に足る、ゆえに『カザンハン国史』の一五三〇年以降の記述は、一次史料として貴重なものであると主張している。④

モイセーヴァの主張するように、確かに『カザンハン国史』においてはカザンの地理や周辺の民族についての詳しい記述が見られるが、これだけでは著者の言葉を信じる十分な根拠とは言えない。むしろ、地理や民族の詳述は例外で、『カザンハン国史』においてはカザンハン国の制度や社会について全く言及されておらず、名前が列挙されるモスクワの将軍たちに比して、個人として登場するタタールは、ごく限られたものである。このため、『カザンハン国史』を読む限りでは、著者はカザンの内部の事情にそれほど通暁していたとは思えない。

また、上引の一節を信じるとすれば、著者は、一五五一年シャーフ・アリー・ハンの治下に行われた、カザンにいる全てのルシの捕虜の解放の時にも解放されず、カザン陥落時までカザンに残っていたことになる。⑤更に、『カザンハン国史』に見える、文芸作品として高い評価を得ている文体や、聖書や年代記の引用をみれば、著者は二〇年間カザンで異教徒として生活していたにも関わらず、当時のロシアの知識階級の最上位に属する人間であったといえる。このような人物がいないと断言することはできないが、上引の一節は臨場感を高めるための文学的な技巧と考える方が説得力はあろう。

キーナンは、著者の履歴の記述を虚構とした上で、『カザンハン国史』第四章に登場する Обляз (Abū al-Ġazī) と、クリムとモスクワの間で交わされた外交文書によって、一四八九—一五〇三年の間、モスクワの書記 бахши として活躍したことが明らかになる Аблез、また、一六四〇年に皇帝の財産目録をつくるよ

う命ぜられた書記 Дьяк, Гаврило Облязов に注目し、『カザンハン国史』は書記 Гаврило Облязов によって、或いは彼のために記されたのではないかと推測する。⑥

この推測は、『カザンハン国史』の著者の名を明らかにする試みとして興味深いものではある。しかし、史料に登場する名前の一致のみを根拠としたキーナンの説の論拠ははなはだ不十分であり、キーナンの説は受け入れられるものではない。

このほかケンプフェルは、『カザンハン国史』にみえるタタールの伝承、カザン人への深い同情や、チンギス・ハンの血を引くシャーフ・アリー・ハンへの称賛の記述を説明するために、モスクワへ亡命したタタールによって記された書物をモスクワのルシが編纂したのではないか、という仮説をたてている。⑦ペレンスキも、『カザンハン国史』に様々な要素が混交していることから、『カザンハン国史』は複数の人物によって編纂されたものであろうと推測しているが、⑧証明されるには至っていない。

現在のところ、著者について確かなことは、後述するように『カザンハン国史』が政治的プロパガンダとしての性格を有していること、『カザンハン国史』の記述と年代記や物語、外務庁の書簡との一致が確認されることから、モスクワ宮廷の書記か、外務庁の役人、あるいはそれらの人々と深い関係を持ち、私的な書物ばかりでなく、公的な文書をも利用できる立場の政府筋の人物であろうということのみであり、『カザンハン国史』におけるカザン陥落までの二〇年間の記述を、目撃者による一次史料としては使用すべきでない。

① "Казанская история", подготовка текста и перевода Т. Ф. Волковой (*Памятники литературы древней Руси: Середина XVI века*, с. 300–565, комментарии с. 601–624), Москва 1985（以後 КИВ), с. 302. 現在までに『カザンハン国史』の校訂テキストは、Кунцевич による *ПСРЛ*. XIX, КИМ, КИВ の三種が出版されている。КИМ の評価は低い（В. Н. Автократов, "Критика и библиография «Казанская история» под. Г. Н. Моисеевой", *Исторический архив* IV, 1955, с. 221–222 参照）。*ПСРЛ*. XIX は、数種の写本のヴァリアントを注記した精緻な校訂であるが、Моисеева によって発見された最も古い第一タイプの写本が利用されていない。КИВ では、この写本が異本として使用されているため、この点で КИВ の方が優れていると考えられるため、本稿では杜撰な校訂ではあるが、КИВ を用いる。

② 「私が自らの目で見」[КИВ, с. 366]、「その時私はまだカザンに住んでいた」[Там же, с. 400]、「(カザンにおいて) 我々全てが目撃し」[Там же].

③ А. С. Орлов, "Казанский летописец", *История русской литературы II-1, литература 1220–1580 гг.*, М.–Л. 1945, с. 468.

④ Г. Н. Моисеева, "Автор《Казанской истории》", *ТОДРЛ*. IX, 1953, с. 277–84.

⑤ Моисеева はこれに関して、『カザンハン国史』の著者はモスクワ

から何らかの密命を帯びてカザンに留まっていたのではないかと推測している［Там же, с. 279-80］が、根拠は何もなく、全くの憶測に過ぎない。

⑥ E. L. Keenan, "Muscovy and Kazan', 1445-1552: A Study in Steppe Politics", unpublished Ph. D. dissertation, Harvard University 1965, p. 71.

⑦ F. Kämpfer, *Historie vom Zartum Kazan (Slavische Geschichtsschreiber*, vol. VII), Graz et al. 1969, SS. 32-33.

⑧ J. Pelenski, *Russia and Kazan: Conquest and Imperial Ideology (1438-1560s)*, The Hague/Paris 1974, p. 130.

三　成立年代

『カザンハン国史』の原型テキストは現在まで伝わっておらず、多くの写本のなかで最も早い時期に位置づけられるのは、一七世紀初頭の写本である。成立年代についても、原型テキストについてと同様これまで様々な議論が行われている。

まず、クンツェヴィチが『カザンハン国史』の以下の記述から、一五六四―一五六六年成立を主張した①。

1　セミョン・ミクリンスキー Семен Микулинский 公（一五六二年死亡）の死が記されている。［КИВ, с. 492, 494］

2　府主教マカリー Макарий（一五六三年一二月三一日死亡）が過去の府主教として描かれている。［КИВ, с. 454］

3　シャーフ・アリー・ハン（一五六七年四月二〇日死亡）について、現在時制で記され、生存している人物のごとくに述べられている。［КИВ с. 492, 556］

4　ウテミシュ・ギレイ・ハン Ötemiš Girey Ḫān（一五六六年死亡）について現在時制で記されている。［КИВ, с. 556］

モイセーヴァはこの年代を、一五六四―六五年のモスクワの政治状況が『カザンハン国史』に反映されている、として、クンツェヴィチ説の下限を一年縮めようとした②。

しかし、キーナンはこのモイセーヴァの説に根拠が無いことを証明し、更にクンツェヴィチの挙げる3と4の理由について、古ロシア文学における現在時制の使用方法を考えると、決定的なものとは言えない、として、クンツェヴィチ、モイセーヴァ両者の提示した『カザンハン国史』の成立年代を否定する。そして、(1)半分以上の『カザンハン国史』の写本が一七世紀前半に位置づけられ、一六世紀にはっきりと位置づけられる写本が存在しない、(2)『カザンハン国史』の写本が一七世紀前半に著作された、或いは一般的になった著作と共に発見されることが非常に多い、(3)『カザンハン国史』において使用されている басма や персуна という語は、一六世紀にも使用例はあるが、一七世紀において一

般的に使用されるようになることを根拠に挙げ、また、(4)『カザンハン国史』のような歴史物語は、ロシアでは一七世紀になってから、ポーランド語やラテン語の翻訳小説の影響をうけて成立したものであり、『カザンハン国史』が完全にモスクワの資料に基づいて一六世紀半ばに記されたと考えることはおかしい、として、『カザンハン国史』が一七世紀前半、おそらくは書記 Обязов の勤務期（一六二六―四〇）に成立したものであることを示唆する。③

キーナンのモイセーヴァの説に対する反証は説得力をもつが、彼による新たな説は受け入れられるものではない。右記の(1)から(3)は論拠とするにはあまりも貧弱であり、また、キーナンは一六世紀の半ばにロシアで歴史物語が成立し得ないとするが、ロシアにおける歴史物語の萌芽は、一五五五年までに成立していた『皇帝・大公イヴァン・ヴァシリエヴィチ治世初期の年代記』に既に見られる④ため、一六世紀後半にロシアで歴史物語が成立する可能性は十分考えられ、キーナンの指摘が的外れなものであることは明らかである。

一方オストロウスキは、近著でキーナンの説を支持している。彼によれば、モスクワを「第三のローマ」と呼ぶ、という『カザンハン国史』第五章中の記述は、一六世紀にはふさわしくない表現である。ロシアと「第三のローマ」を結びつける思想自体は、一六世紀はじめのフィロフェイ Филофей のものであるが、この思想における「ロシア皇国」は教会的、反モスクワ的なものであり、「ロシア皇国」と「モスクワ」を区別して考える必要があるとする。そしてオストロウスキは、一七世紀の半ば、「モスクワ公国」が以前の「キリスト教徒皇国」「ロシア皇国」という概念にとって代わったときになってはじめて、「第三のローマ」がモスクワ公国と直接結びつけられたのである、と主張する。⑤

しかし、まず、モスクワ公国がいつから「キリスト教徒皇国」などの概念と入れ替わるようになったか、という点について、一七世紀半ばとする根拠をオストロウスキは記していない。本当に一七世紀半ば以前にこの入れ替わりが起こっていなかったのか、たとえ「モスクワ＝第三のローマ」が、「第三のローマ」理念の最も完成された形であると認めるにしても、疑問が残る。第二に、確かに近来の「第三のローマ」研究においては、「第三のローマ」が世俗的なものではなく、教会と結びついた概念であったことは証明されているが、モスクワは「第三のローマ」に比べ、より宗教的意味あいが濃い「新しいローマ」の府主教座として、すでに一五四〇年に言及されている。⑥また、一五八九年には総主教座として同様に言及されている。⑦一五九四―一六〇〇年に記され

た聖書への書き込みには、モスクワと第三のローマが直接結びつけられた最初の例がみられること[8]からも、「第三のローマ」とモスクワとの結びつきを根拠に、作品の成立年代を一七世紀とすることは無理であろう。

ペレンスキは、『カザンハン国史』の成立年代を、一六世紀後半の思想的・文学的な特徴と、ロシアのオプリチニナ期の政治社会的混乱のなかで人心の統一を図るために『カザンハン国史』が成立したとする仮定から、一五六〇年代に大部分が編纂された、と推定するが[9]、一五七一年のクリムハン国の襲撃によるモスクワの炎上や、一五八二年まで続いたリヴォニア戦争など、一五六〇年代以降もロシアの社会的混乱は継続しており、政治社会的な混乱は、『カザンハン国史』の成立年代を一五六〇年代に限定する根拠としては弱い。

では、『カザンハン国史』の成立年代をいつに設定するのが適当か。クンツェヴィチの説により、その成立が一五六四年を遡るものでないことは明らかである。一方、下限については、キーナンの説が出された後もロシア側ではクンツェヴィチ・モイセーヴァの、主にテキスト中の現在時制の使用を根拠とした説が認められている。キーナンは上述のごとく、モイセーヴァの一五六五年成立説を反駁したが、クンツェヴィチの説の信憑性については ただ「決定的でない」と述べるに留まっている。そこでここではクンツェヴィチの一五六六年成立説がどの程度信頼できるものなのかを明らかにする。

一六世紀から一七世紀のロシアの歴史的な叙述には、文学的な技巧として過去のことを述べる場合にも動詞に現在時制が使用されるようになる[10]。『カザンハン国史』のなかでも、明らかに過去の事柄を述べている部分で、現在時制が使用されている箇所が存在する[11]。

クンツェヴィチが根拠とした箇所は、シャーフ・アリー・ハンについては

и все знают его (=Шах-али) и дивятся мужеству его, и похваляют. [КИВ с. 492]

то бо есть царь великороден сый и отечествомъ болши всех царей,……[КИВ с. 556]

の二箇所である。前者については、シャーフ・アリーの死後に人々がその記憶を留めているとも考えられる。注目すべきは、この第一の部分に先立つ

Бе бо царь Шигалей в ратномъ дело зело прехитръ и храбръ, яко инъ никто же таков во всех царях, служащих самодержцу, и вернейши всех царей везде и

верных наших князей и воевод служаше, и нелестно за християны страдаше весь живот свой до конца.

という文中の傍線部「彼は誠実に、キリスト教徒のために自らの全ての人生を最後まで苦しんだ」である。до конца を（[カザン陥落という）最後まで」と補って読むことも不可能ではないが、引用の前半がシャーフ・アリーの性質を述べているにも関わらず、未完了過去の時制で記されていることをも考え合わせると、この文章が執筆された当時、既にシャーフ・アリーが物故していた可能性も十分考えられる。

ウテミシュ・ギライ・ハンについて現在時制で記されている箇所は

И изучень бысть русской грамоте горзда, и препираше многих в беседе, от книг истязающихся с нимъ, никтоже може[т] препретися с нимъ. [КИВ с. 556]

というものであるが、може[т] が現在を表しているのであれば、може[т] と同様に現在時制で記されるべき動詞 препирати が、未完了過去の時制で記されているので、現在時制 може[т] は文学的な技巧である可能性が高い。よって、クンツェヴィチによる『カザンハン国史』成立年代の下限一五六六年の根拠は二つとも信頼に足るものではないということになる。

『カザンハン国史』は、一五五〇—六〇年代、府主教マカリー時代に編纂された年代記や『階梯書』と共通した特徴を有しつつも、ブイリーナなどの口承を取り入れ[13]、人物描写に善悪両面の要素を加える[14]など、一七世紀以降のロシア文学の特徴を備えた、一六世紀後半から一七世紀にかけての過渡期的な作品である。また、内容的にも一方ではオプリチニナ期にふさわしい記述があったり、一方では一五六四年以降公的な文書には現れないはずのクルプスキー公の記述があったりと、文学的な特徴や内容から成立年代を特定することは難しい。従って、現時点では下限について、写本の年代に拠るのが適当である。ドゥブロヴィナの第一タイプに含まれる最も古い写本が一六一〇—二〇年に位置づけられるという事実、また、第二タイプに含まれるかなりの数の写本が一六二〇年代に位置づけられるため、第二タイプの祖本が一六一〇年代までに成立したのは確実であるという事実[15]より、目下の所は『カザンハン国史』の原型テキストは一五六四年以降一七世紀初頭までに成立したとしておくのが無難であろう[16]。

なお、一において、明らかにイヴァン雷帝の死後に記されたと分かる最後の二章が、イヴァン雷帝没後に付け加えられたものだとするドゥブロヴィナの見解を紹介したが、筆者が三種の『カザンハン国史』の校訂テキストを見た限りでは、最後の二章が後に

書き加えられたものであるという確証を得られなかった。ここでは、この二章の分析によって、『カザンハン国史』成立年代の上限或いは下限がイヴァン雷帝の死没年一五八四年となる可能性があることを述べるに留める。

① Кунцевич, Указ. соч. с. 176–187.
② КИМ, с. 20–21 ; Монсеева, "Автор《Казанской истории》", с. 273.
③ Keenan, "Coming to Grips with the Kazanskaya Istoriya", pp. 149-50, 174-175, 182 ; idem, "Muscovy and Kazan" 1965, p. 71.
④ Д. С. Лихачев, *Русские летописи и их историческое значение*, М.–Л. 1947, с. 364.
⑤ Ostrowski, *op. cit.*, p. 242.
⑥ Н. В. Синицына, *Третий Рим*, М. 1998, с. 251, 306. なお、「第三のローマ」と「新しいローマ」は、既に一五二四―一五二六?年に記されたイヴァン・ヴァシリエヴィチ宛の書簡で併置されている。「第三のローマ」については栗生沢猛夫「モスクワ第三のローマの理念考」『ロシアの思想と文学――その伝統と改革の道』金子幸彦編、恒文社一九七七年、同「『モスクワ第三のローマ』以前」『えうゐ』七号一九七九年参照。
⑦ Н. В. Синицына, Указ. соч. с. 306.
⑧ Там же.
⑨ Pelenski, *op. cit.*, pp. 128-131.
⑩ Д. С. Лихачев, *Поетика древнерусской литературы*, Ленинград 1967, с. 291–295.
⑪ И посыраеть отай.....[КИВ с. 310] ; и одолеваеть великого князя [КИВ с. 324], и т. д.
⑫ *ПСРЛ* XIX ; КИМ により補った。
⑬ N. K. Gudzy, *History of Early Russian Literature*, New York 1949, p. 349.
⑭ Лихачев, *Поетика*, с. 104–106.
⑮ Дубровина, Указ. соч. с. 15, 46.
⑯ 一九九八年一一月二日の内陸アジア学会の発表において筆者は Кунцевич の見解を支持したが、ここに訂正する。

四　『カザンハン国史』の史料としての問題点と価値

『カザンハン国史』が文学作品として高く評価されている一方、史料としての価値には多くの疑問が呈されているのは、この史料が情報の誤りと虚構性という問題を含んでいるからである。

『カザンハン国史』の多くの部分は、ロシアの諸年代記や『ヴラヂミル諸公物語』①などの物語とよく一致しており、著者が執筆に際してこれらの書物を参照したことは確かであるが、他の年代記と一致せず、明らかに誤った情報を伝えている部分も多い。『カザンハン国史』の著者はおそらく手元にこれらの年代記全てを有し、参照しながら執筆していったわけではなく、これらの年代記を読んだ記憶に頼って、或いは年代記を読んだ時に取った簡単なメモをもとに執筆した部分も多いと考えられる。

一方『カザンハン国史』の虚構性は、イヴァン雷帝の描写において最も顕著に見られる。

彼（イヴァン雷帝）はいつも、神が彼に対して、異教の不信心者がキリスト教徒にもたらしたことに対する報復を行う方法を教示してくれるよう、神の前で泣き、願っていた。彼は、自らのどの地方においても軍人に気づくと、彼らに愛情を注ぎ、年老いた者を父の如く保護し、全ての働き盛りの者は兄弟のように、若者は息子のように、全てに対して熱烈な敬意を表した。[КИВ, с. 370]

という一例から明らかな如く、『カザンハン国史』の著者は、イヴァン雷帝を敬虔な理想の君主として描くという政治的な意図を有している。②

さらに、モスクワによるカザン征服の正当化という政治的な意図による虚構もみられる。カザンが古くからルシの勢力下にあったとされ、また、ルシの聖者セルゲイやニコライの幻がカザン陥落を予言したと語られ、カザン征服が神の意図であることが主張される。ただ、このようなカザン征服の正当化は、ペレンスキの研究が明らかにしているように、③モスクワによるカザンの征服を記録したロシア年代記に共通のものであり、『カザンハン国史』のみの特徴とは言えない。

また、『カザンハン国史』は年代順に出来事をならべた年代記ではなく、一つのテーマについて語った物語であるため、文学表現のための虚構を豊富に含んでいる。中でも文学表現のための虚構を考える上で大切なのは、古ロシア文学の литературный этикет である。これは形容の言葉の選択や比喩といった表現上の事柄を決定するだけでなく、内容、特に人物の描写に影響を与える。執筆者によって人物に善悪の性格付けがなされ、登場人物はその評価に沿って行動するように描かれる。善と判断された人物は、過去の物語の英雄や聖者をモデルとして、その言葉、行動パターンが繰り返される。悪人も同様にパターン化される。この литературный этикет は古い文献ほどよく守られており、一六世紀頃から破られ始め、完全に影響力を失うのは一八世紀になってからである。④

一六世紀の半ばまで、ロシアで記される作品において、タタールは常に悪者として描かれていたが、『カザンハン国史』の著者はカザンの人々に同情的な姿勢を示しており、オルロフによると、『カザンハン国史』は литературный этикет を破り、宗教的寛容 вероторпимость を示した最初の文学作品である。⑤しかし、『カザンハン国史』の人物描写を詳しく見ていくと、『カザンハン国史』にはなお、литературный этикет の影響が強く見られ、

人物の描写に著者の一面的な評価がはっきりと現れていることがわかる。

そこで、以下に『カザンハン国史』の四人の登場人物、ウルグ・ムハンマド・ハン Ulug Muḥammad Ḫān、ムハンマド・アミーン・ハン Muḥammad Amīn Ḫān、スユン・ビケ Süyün Bike、シャーフ・アリー・ハンを例にとり、『カザンハン国史』における文学的な虚構を明らかにする。

『カザンハン国史』九―一一章に登場する西部ジョチウルスのウルグ・ムハンマド・ハンは、ハンの位を追われた後、少数の兵とともに北上してモスクワ公国の勢力圏のベリョフに行く。ここで一四三七年モスクワ軍との戦いが起こるが、ウルグ・ムハンマド・ハンは、自軍の何倍ものモスクワ軍に対して勝利を収める。『カザンハン国史』では、ウルグ・ムハンマド・ハンは誠実な人間として強調され、ベリョフでの戦いの前に、キリスト教会の扉の前に跪き、キリストに祈りを捧げる場面が描かれる。そして、彼の勝利は彼の誠実さ故である、とされる。一方、ロシアにとってははるかに大事件であるはずの一四三九年のウルグ・ムハンマド・ハンによるモスクワ攻撃については、事実が簡単に述べられるに留まる。

また、カザンのムハンマド・アミーン・ハンは、異母兄アリー・ハン ʿAlī Ḫān がカザンのハンとなった一四七九年、モスクワに亡命し、しばらくモスクワ宮廷に仕えたのち、一四八五年にイヴァン三世によってカザンのハンとされた。イヴァン三世に「兄弟、息子」とよばれ、モスクワと長く良好な関係にあるが、一五〇五年以降ノガイと結んでモスクワと対立するようになる。『カザンハン国史』では一二―一五章に裏切り者として描かれ、その残虐性と、報いとしての癩病による死が詳述されるが、カザン即位直後の良好な関係には触れられていない。

カザンの王妃であり、ノガイのアミール、ユースフ Yūsuf の娘スユン・ビケは、カザンのハン、ジャーン・アリー Jān ʿAlī と結婚するが、ジャーン・アリーがカザンで殺害された後、ノガイオルドに戻る。そののち、カザンのサファー・ギレイ・ハンの王妃となる。サファー・ギレイの死後は、息子の摂政となって一五四九年から一五五一年までカザンを支配するが、カザンの陥落前に、カザンの人々によってモスクワに引き渡される。『カザンハン国史』における描写は摂政時代からであり、ジャーン・アリーとの結婚については言及されていない。悲劇の王妃としての姿に焦点が絞られ、彼女がカザンからモスクワに発つ場面には第三八章と第三九章がまるまるあてられている。[6]

シャーフ・アリー・ハンは、カシモフ皇国に生まれ、一五一八

年にカシモフ皇国のハンとなり、[7] モスクワの傀儡としてカザンハン国末期にカザンで三度即位した。モスクワにあったとき、カザンと密かに連絡を取っていたことが理由でイヴァン雷帝の寵を失い、一時期幽閉されるが、後に赦されて、カザン遠征にも参加し、カザン陥落後は将軍としてリヴォニア戦争で活躍する。『カザンハン国史』では、シャーフ・アリー・ハンはロシア貴族に勝る英雄として称賛されており、イヴァン雷帝の忠実な臣下として描かれている。幽閉されていたことは言及されていない。

このように、『カザンハン国史』では、著者による性格付けを覆す、他の史料から明らかになる事実は不自然なほど簡略に述べられたり、省略されたりしている。タタールを一概に敵・悪者としない点では литературный этикет を破っているが、一面的な人物描写という点で、まだ литературный этикет の影響が大きく、人物描写には大幅な潤色が施されている。

しかしながら、『カザンハン国史』はまた、これをフィクションと断定して歴史家が視野の外におくことを許さない面をも有する。

『カザンハン国史』の著者は、ロシア年代記、カザンの年代記、カザンのハン、貴族の口述から情報を得ていたことを作品中で述べている。[8] が、『カザンハン国史』の記述には、ロシアの年代記にはみえない情報が含まれており、その中には他の史料との一致が確認できるものも存在する。

例えば『カザンハン国史』第一四章には、ヴァシリー三世が、対立するようになったカザンのムハンマド・アミーン・ハンに対して一五〇五年に派遣した軍隊とその壊滅について、非常に詳しく記されている。この戦いの詳細について、『カザンハン国史』以外の年代記は語らないが、一五一七年にモスクワに滞在したヘルベルシュタイン Herberstein の『モスクワ国家についての覚え書き』におけるこの戦いについての記述は、『カザンハン国史』第一四章の情報と共通点が多い。[9]

また、『カザンハン国史』の記述の内、ルシとタタールの伝承に基づいていると考えられるものもある。[10]『カザンハン国史』第六章では、バトゥの死後サイン・ハンが後を継いだことになっている。もちろんこの記述自体は誤りであるが、ロシアの他の年代記には見られないバトゥの異称サイン・ハンを『カザンハン国史』の著者が知っていたという点は注目に値する。

伝承との関連で興味深いのは、『カザンハン国史』におけるカザンの有力者チョラ公の記述である。『カザンハン国史』第二五章では、一五四六年のシャーフ・アリー・ハンの二度目のカザン支配が描かれる。この時、シャーフ・アリーに敵対するカザン人

のなかで、ただ一人彼の味方となるのがチョラ公である。チョラ公は自らの命を賭してシャーフ・アリーのカザン脱出を助けるが、シャーフ・アリーに裏切られ、カザン人との激しい戦いの末に勇敢に戦死する。チョラ公は『カザンハン国史』における英雄の一人である。他の年代記からはチョラ公について僅かな情報しか得られないが、タタールの口承文学であるダスタン『チョラ・バトゥル』は、彼の生涯について雄弁に物語る。『チョラ・バトゥル』に語られるチョラ公は、ルシ対タタールという単純な構図の中で、ルシと戦ったタタールの英雄とされ[11]、また、『チョラ・バトゥル』に登場する英雄クルンチャク Kulunčak[12]も、『カザンハン国史』三三―三四章に詳述されている。

キーナンは、『カザンハン国史』にタタールの伝承が取り入れられているというクンツェヴィチの主張に対して「立証されていない」と一蹴するが[13]、『チョラ・バトゥル』はタタールのダスタンであり、『カザンハン国史』はロシアの年代記であってみれば、前者が後者をもとに成立した可能性は極めて低く、『カザンハン国史』のチョラ公の記述についてはタタールの伝承、或いはタタールからの伝聞に拠ると考えて誤りないであろう[14]。

① この書については栗生沢猛夫「『ヴラヂーミル諸公物語』覚書」『スラヴ研究』二四、一九七九年参照。

② キーナンは『カザンハン国史』は政治的なものではなく、文学的な動機から執筆されたとする ["Coming to Grips with Kazanskaya Istoriya" pp. 176-182]。確かに文学的な意図によって執筆された部分も存在するが、『カザンハン国史』全体を通してみられるイヴァン雷帝の理想化と、次に述べるカザン征服の正当化という『カザンハン国史』の政治的プロパガンダとしての主たる性格を否定するのは誤りである。

③ Pelenski, *op. cit.*

④ Лихачев, *Поетика*, с. 84-108.

⑤ Орлов, Указ. соч., с. 464.

⑥ Г. Н. Моисеева, "Казанская царица Сююн-бике и Сумбека《Казанской истории》", *ТОДРЛ*. XII, 1956 は、『カザンハン国史』における Süyün Bike についての専論である。

⑦ В. В. Вельяминов-Зернов は、Šah 'Alī が一五一六年にカシモフ皇国のハンになったと述べており [*Исследование о Касимовских царях и царевичах I-IV*, СПб. 1863-1887, I, с. 247-248]、カシモフ皇国について Вельяминов-Зернов と並んで一書をものした Н. М. Шишкин [*История города Касимова съ древнѣйшихъ временъ*, Рязань 1887/1891, с. 15] や М. Худяков ["Очерки по истории Казанского ханства", *На стыке континентов и цивилизаций…: Из опыта образования и распада империй X-XVI вв.*, Казань 1923,Москва 1996, с. 587]、トルコ側から解説をしている A. Temir ["Kazan Hanlığı", *Türk Dünyası El Kitabı*, Ankara 1976, p. 941] もこの説を踏襲しているが、これは誤りである。

Вельяминов-Зернов の根拠は、Карамзин の著書に記された Muḥammad Girey から Василий 三世への一五一六年の書簡における、

Šāh ʻAlīがカシモフ皇国を治めているために、クリムのシリン部の者たちがルシとの友好を誓うのを望んでいない、という記述である[Карамзин, Указ. соч. VII пр. 150]。*Памятники дипломатических сношений Московского государства с Крымскою и Ногайскою ордами и Турциею: Сборник Русского исторического общества*（以下 *РИО.*）XCV には Карамзин の使用した一五一六年一一月の書簡の校訂が掲載されているが、こちらでは、Šāh ʻAlīではなく、彼の父 Šāh Awliyar がカシモフ皇国を治めているとされている[*РИО.* XCV, c. 388]。Карамзин の記述が誤りであり、*РИО.* の記述が正しいことは明らかである。なぜなら、一五一六年の書簡では、上記の文章に続き、Šāh Awliyar からゴロジェツを取り上げて、それを Girey 家の誰かに与えるように、とクリム側の要求が続けられており、一五一九年五月に Василий 三世の使者は、一五一六年の書簡に言及したのち、「彼が亡くなると、大公は彼の息子をカザンのハンとなした」[Там же, с. 663] と述べているからである。Šāh ʻAlīの息子はカザンのハンとはなっていないので、Muḥammad Girey がゴロジェツから追放するように要求したのは、Šāh ʻAlīではなく、彼の父 Šāh Awliyar であったことがこの記述からはっきりする。Šāh Awliyar は一五一八年八月の書簡でもカシモフ皇国の支配者として言及されており [Там же, с. 520]、一五一九年の年始にはカシモフのハン Šāh ʻAlīがカザンへ派遣されているので、Šāh Awliyar の死と Šāh ʻAlīのカシモフ皇国即位は一五一六年ではなく、一五一八年である。

⑧ *КИВ*, с. 302.

⑨ Sigmund von Herberstein, *Notes upon Russia* (*Hakluyt Society Works*, Series I, vol. X, XII, Part I, II), London 1851-52, part II, pp. 59-60.

⑩ Кунцевич, Указ. соч., с. 509.

⑪ 『チョラ・バトゥル』については H. B. Paksoy, "Chora Batur: A Tatar Admonition to Future Generations", *Studies in Comparative Communism: an Interdisciplinary Journal* XIX: 3-4, 1984; 山内昌之『ラディカル・ヒストリー』中公新書 一九九一年 第二章参照。

⑫ 彼の勇敢な戦いぶりについては、一五五〇年のカザン攻防戦時にカザンに滞在していたアストラハン生まれの詩人 Muḥammad Ṣarīf がチャガタイ語で記した *Ẓafar nāma-yi wilāyat-i Qazān* にも記されている。この書については Z. V. Togan, "Kazan Hanlığında İslâm Türk Kültürü", *İslâm Tetkikleri Enstitüsü Dergisi* III, 1959–60, pp. 195-96 参照。

⑬ Keenan, "Coming to Grips with Kazanskaya Istoriya" p. 151.

⑭ このほかに、第七章における、カザンがかつて竜のすみかであったという逸話が、『皇帝・大公イヴァン・ヴァシリエヴィチ治世初期の年代記』に記された府主教マカリーの「竜のすみかたるカザン」という言葉（*ПСРЛ.* XXIX, с. 114）と符合しており、また第六二章における、カザンのハン、ヤードガール・ムハンマド Yadgar Muḥammad が見た月と狼の夢についての記述は、カザン陥落について歌うロシア民謡のなかの、カザンの王妃の夢と同じ内容である（Кунцевич, Указ. соч. с. 437）。これら二つの一致は、前者については『カザンハン国史』の著者がマカリーの言葉を引用した可能性、後者については、このロシア民謡がロシアで広く親しまれた『カザンハン国史』をもとに成立した可能性を否定できないものの、『カザンハン国史』と伝承との密接な関係の傍証にはなろう。

むすび

『カザンハン国史』は、内容においてはもちろん、そのテキストの変遷においてさえもカザン征服についてのロシア側の思想を色濃く反映したものであり、この点についての価値は高い。しかし、歴史事実を再構成する史料としては、目撃者による一次史料とは言えず、明らかな誤り、文学的な虚構を含んでおり、他の年代記に比べ信憑性に欠ける。ただ、他の年代記には記されていない数々のエピソードの中に、伝承など独自の情報を含んでおり、その点でキーナンの主張するように、『カザンハン国史』を虚構として全く無視することは適切ではない。『カザンハン国史』の虚構性を考えると、何らかの対応する資料が発見されない限り、そのエピソードを史料として使用することはできないので、『カザンハン国史』は補助史料として使用するべきである。

以上で、『カザンハン国史』の書誌について欧米と旧ソ連の見解を統合し、『カザンハン国史』を史料としていかに使うかという指針を示すことができたと考える。三の成立年代については今後写本を見る機会を得て、さらに絞り込むことを試みたい。

付記　脱稿後に『カザンハン国史』について論じた筆者未入手の論文 Добродомов, Б. Г, и Кучкин, В. А., "Казанская история и основание Казани", *Герменевтика древней русской литературы*, от. ред. Земен, А. С., М. 1989 の存在を知った。この論文についての検討は別稿に譲りたい。

（京都大学大学院文学研究科博士後期課程　　）